

臺灣觀測旅行記

村上 忠 敬

去る十一月二十四日、フォルベス彗星の發見電報が京都に到達した。そこで、これより先き、十月二十八日に山崎氏が發見された新彗星こゝろが同じでないか山本先生は直ちに氣附かれた。

京都天文臺では二十五日と二十六日の早朝に數人でこの彗星をさがしたが、電文に示されてゐる位置には何もなかつた。僕は二十六日の朝、豫報位置を少しく離れた所に彗星らしいものを見たが、果して何物なりや判定出来なかつた。(その後色んな都合で連續觀測が出来なかつた)東京の方からも見つからないと云ふ電報が來てゐるので、皆力をおこして觀測をやめてゐた。所が十二月中旬に外國から詳報が到達して、前の電文に誤りがあつたこと、僕が見たのはやはりこの彗星であつたこと、これは山崎氏發見のものと同じ物に違ひないことなかがわかつた。

従つてその後の觀測に依つてこの彗星の本性を確かめることは望ましいことであつたにも係らず、今は早や彗星は容赦なく南下して内地での觀測は困難になつてゐた。山本教授はふと觀測のための臺灣行きを思ひ立たれ、僕は及ばぬものながら一緒に行くことを進められた。丁度此の冬休みには何も豫定を立てゝ居なかつたし、歸省する必要もなかつたので喜んで隨行することにした。丁度、時は十二月の末で、僕は試験の最中であつた。大急ぎで旅行の準備萬端を整へて、二十四日急行で下關に向ふことになつた。

出發から基隆につくまで

山本先生は二十四日の午後三時頃京都をたゝれた。僕は太急ぎで星の圖や曆や計算用紙などを友人から借りた鞆につめこみ同じ日の夕方出發した。

二十四日の夜は山陽線の車中に夢をむすび、明るる二十五日、僕は本當に初めての遠い航海のことなきを氣にしながら、汽車が下關に着くのを待つた。沿線はずつと小雨がふつて、東の空がしらむと共に見えてくる瀬戸内海の雨にかすんだ風景も情趣に富んだものであつた。朝九時、下

關驛で山本先生に出会つた。同好會の下關支部幹事廣津藤吉氏及び會員林松次氏等に送られて、二人は十一時ランチで大和丸に乗船した。正午、門司のタイムボールの落下を觀測しようこ、クロノメーターを甲板上に出して待つてゐたが都合が悪くてだめだつた。船は廳で錨を抜いて進み出した。午後は室に入つて計算の準備なごをしてゐる間に日は没してしまつた。日没後の腓色にかゝやいた雲は美しかつた。船は靜かな海上を眞直に西進する。海はおだやかで全く立海灘ご云ふ感じがしない。夕方は殆んど丸い月ご木星、火星、金星ごが並んで居るのを眺めながらデツキを散歩した。室に入つて臺灣での觀測の下調べなごをした。

初めての航海なので僕は却々船室内におさまつて居れなかつた。船はコースを變へて南南西の方向に進んでゐる。全く靜かな海の上に、進んでゐるのは一萬噸の巨船である。メインマストの頂上に木星が輝いてゐる。星！海！船！燈臺！月！ご想つてゐる間に自分をわすれてゐた。

二十六日朝四時半頃（船の時計では四時である）眼がさめたのでボートデツキに出て空をながめる。アークトゥル星が赤い色で光つてゐる。日の出を見たいご思つてゐたが、却々出さうにないので、又室に歸つてベッドに横になる。雲のために日の出は見えなかつたが、しばらくしてから「ばら」色の放射線が波の上に差しかゝつてゐる景色は得も云はれず美しかつた。今は早や何れの方向を見ても海ご空ばかり。此の日は僕は外の船客ご一緒にデツキゴルフの仲間入りをして遊んだ。山本先生は時々デツキを散歩される外、大方室内に引つ込んで彗星軌道の計算をして居られた。夕方五時半頃、先生ご二人で日没時のグリーンフラッシュを見ようご待ちかまへてゐたが相憎く水平線上に雲があつて、確かには觀るこごが出来なかつた。満月に近い月ご、その近くに一度半程はなれて火星が上つてきた。ほこりまみれの空ご違つて、透みきつた海上の蒼空は氣持ちのよいものだ。室内にごちこもるのが惜しくて、この夜も僕は星ばかり氣にして、一人でぐるぐるご歌をうたひながらデツキを歩きまわつた。オリオンが頭の上に近い。船は早や可成り南に来てゐるらしい。船のニュースに「火星ご月ご近接す、肉眼にてみ見る」ご出てゐた。そのためか、船員以下ボーイまでが時々甲

板に出てきては空を仰いでゐるのを見受けた。此の日正午の船の位置北緯三十度二十分，東經百二十六度七分。

この一日を顧るに朝から晩まで空と雲と海の外，船影一つだに見なかつた。それにしても京大總長・市河農學部長・檜垣野球部監督の率ひられる京大野球團など京大關係の人で船中は賑ひだつた。

二十七日。機關の振動は餘り氣持ちのよいものではない。その性か，今朝も亦四時半にはちやんこ目がさめる。甲板へ出て珍らしい星をこ思ひながら南の低い空を望む。アケルナーやアルファ・センチウリを思はれるものが見えるが附近に雲があるので確かには云へない。南の方ばかり眺めて一時間程もデッキをぶらつく。餘程暖かで春の様な氣持ちだ。満月が白く波を照してゐる。海は全く静か，北東の軟風。シリウス星が雲間に光る，まるで金星の様だ。又一こ休みして八時に起きた。船の時計がまた三十分遅れてゐる。

西郷南洲に大變よく似てゐる機關長の宮本氏の談しでは，臺灣航路は南に行く程あれなのだそうだが，臺灣につく云ふ今日，いつもの様に靜かで船は殆んど全く動搖しない。「これなら大丈夫ですね」云はうとするこ，宮本氏は「此度の航海で，臺灣行きは平氣だなと大きなこは云へませんよ」と笑はれた。全く珍らしいおだやかな日和である。外の船客は皆荷物をまとめてゐる。山本先生は平氣で朝から計算に熱中して居られる。慣れない僕は全く氣が氣でない。その中に珍らしい形の漁船に會ふ。小さな燈臺のある島の横を過ぎる。陸地が見える。初めてみる常夏の國「高砂」！船はゆうゆうと基隆港に近づく。赤黒い帆を張つたジャンクが走つてゐる。

船は午後二時基隆の棧橋に横着けになつた。基隆の港は立派な港だ。小蒸氣が四方から本船に集る。客は各々上陸する。山本先生は船まで出迎へに來られた人々と談して居られる。僕は，やはり迎へに來られた基隆の同好會員の丸山金彦氏と語し合つた。又，中學時代の親友新納君にしばらくぶりで合ふて舊情を温めた。四時頃出る臺北行の臨時列車に間に合ふ様に上陸した。臺北までは程ないのであるが，僕は窓から珍らしい臺灣の風物をながめて走馬燈の様に走る景色の中に多くの新しい要素を見出した。支

那風の家屋、畑をたがやす水牛、枝が曲りくねつた相思樹の並木、四面黒色ばかりの石炭の山、椰子、木性羊齒、等、等。

臺北では「京大組」を出迎へる人が一杯であつた。臺灣の首都臺北市にも電車がないので、その代りを人力車がやつてゐる。停車場前に兩側に列をなして並んでゐる人力車がまたゝくまに動き出して皆市街地の方に散つて行く。僕等も人力車に數年振りに乗つて旅館朝陽號に投じた。

因みに、臺灣まで持つて行つたものは英國曆、米國曆、星圖、双眼鏡、クロノメーター、天文年鑑の校正刷及び十六糎中村氏反射鏡などであつた。それに、身支度云へば、全く京都の冬に對應するものであつたため、臺灣に来てからは邪魔で仕様がな。船中で「オーバーや冬服は臺灣に居る間、驛にでも預けておこうか」と誰か云はれた通り今日は全く不用になつた。

臺北市滞在と臺南市に向ふまで

内地に居て考へるこゝ、臺灣に渡つて觀測するこゝ云へば一口にすんでしまふが、さて臺灣に来てみるこゝ却々廣くて、地方地方に依つて地勢や天候その他の状況が大變違つてゐるから、觀測地を定めるには詳しく此等の事狀を調査しなければならない。此の日の夕方は山本先生の舊友の方々が多數相繼いで來訪された。その中には今度臺灣旅行中すつこ色々世話して下さつた鐵道局の速水課長、臺北測候所長寺本貞吉氏（同好會員）、臺灣支部幹事見元了氏などが居られた。觀測地選定の條件としては先づ（一）東南の方向の地平線の展望に有利なるこゝ、次に（二）夜中特に夜明前に快晴にして、又（三）空氣清澄なるこゝなきを挙げなければならない。第一の條件は目的の彗星が東南の低空に在るため、第二の條件は目的物が丁度夜明前に漸く東から上つてくるからである。又、目的物は極南にあるために低い所の空を望まねばならないから特に塵埃や霧などの少ないこゝを必要とする。先づこんな條件の下に、上に記した諸氏と相談された結果、大體臺南市が適當であらうと云ふ事に決つた。一體に冬の間は臺北市及基隆の附近は毎日の様に雨が降つたり、そうでなくても雲が空を蔽ふてゐるのに反し、臺南方面は數十日の間殆んど雨が降らないと云ふ話である。（現にこの十二月中臺南測候所では雨量0ミリであつた。）臺南ならば南の方に山は無いし、そ

れに今述べた様な天気で、それに毎日殆んど雨量もないと云ふことで、好適地である。そこで驛止めにしてあつた反射望遠鏡は臺南市に送つて貰ふことになつた。その晩は僕は新納君の家を訪問して久しぶりに細々色々色んな話をして面白かつた。そして臺北市の有名な城壁跡の三線道路を二人で散歩した。新納君と二人、中學時代からの友達、榕樹の並木の間を、その葉かけをもれてくる満月の光を頭上にあびて散歩することは本當に愉快だつた。

二十八日。旅の疲れで朝はおそく起きた。先生は、先生の學生時代のお友達の歓迎會におよばれになつたので、僕は臺北の街を見物旁々牧師をして居られる上與二郎氏を訪問した。上氏は僕の幼時鹿兒島に居られた頃よくうちに見えたところのある人だが、僕は殆んど見覚えがなかつた。楽しく數時間話して歸つた。

京大關係の人が今、多數臺灣に来て居られるので京大同窓の方々の歓迎會があつて、先生は夕食をおよばれになつた。

二十九日。大體こゝ數日間は月の位置の關係で彗星觀測に不適當なので唯今の所、急いで臺南に向はなくてもよい。そこで此日一日も臺北で過したわけ。晝は僕は新納君に案内されて北は大同埕の北の大鐵橋から南は臺北植物園まで町中を歩きまわつた。先生は此の日、京大野球團と C・B 組との野球を觀に行かれた由。夕方は速水氏に案内されて支那街大同埕で臺灣料理の御馳走になつた。

三十日。朝起きると早速出發の準備を整え、臺南行の汽車に乗つた。汽車の中は大部分本島人で、話しは全く通じない。嘉義まで嘉義局の中山氏と云ふ方と隣席で色々臺灣の事情をきいた。汽車は殆んど眞直に南に向つて行く。珍らしい名前の驛をいくつも過ぎた。初めは山麓をつたつてゐたが、濁水溪の鐵橋を渡つてから全然平原に出た。空氣の具合で今日は新高山は見えない。行く中に段々水田がなくなつて甘蔗畑がふえてくる。その邊の土地が皆乾き切つてゐる。成る程、臺灣の北部と南部とが判然と違つてゐるこゝがわかつた。漸く夕方の六時半頃、邊りが暗くなつてから汽車は臺南驛についた。臺南市の中等學校の校長方や臺南測候所長渡邊順四郎

氏の出迎へを受けて旅館四春園に投じた。

火星による恒星の掩蔽と彗星観測に着手するまで

三十一日、臺南市内で中等學校のどれかを観測地點にきめるここになつてゐたが、色んな条件があるから實地調査をしないさ決定出来ない。此の日午前中、市役所の自動車で候補地を一巡して、師範學校の三階南向きの廊下を貸して戴くことにした。

驛止めにしてあつた荷物を師範學校に送り、午後はその荷を解いて今晚の観測に使へるやうにしておいた。此の夕方は、夏の頃から楽しみにまつてゐた火星による一恒星の掩蔽（天界第93號第74頁参照）を観測するつもりであつた。さて、夕食をすまして師範學校に向ふまでは清く澄んだ空にすべての星座が物凄く程はつきりさ光り輝いてゐた。にも係らず、僕等が観測を初めようとしてゐる中に丁度オリオンの附近に雲が出たと思つてゐるさ、たちまち其の方面に擴がつて、丁度掩蔽の時間中、赤い色の火星は姿を見せなかつた。實際二人は非常に残念がつた。山本先生は加州日蝕の時曇られたのと同じ位の恨事だ」さ云つて居られた。（山本一清氏「星につながる人々」第46—100頁参照）物足りない様な氣分に満されてすすごく旅館に歸り、1928年に別れを告げて寢に就いた。

昭和四年正月元日。前から考へてゐた通り此の日は臺灣の最南端（實際は日本帝國の最南端）を極めるここにして、朝六時頃起きて、一番汽車で潮州に向つた。途中高雄で乗り換へ、東洋第一の長橋さ云はれる屏東の鐵橋（下淡水溪）をわたり、潮州から小型の乗合自動車で恒春に向つた。潮州から恒春まで十八里の道を自動車は30哩の速力で走つた。初めは臺灣松の並木のある道路であつたが、段々道が不完全になつて、遂ひには幾たびか橋のかけてない川を横切らねばならなかつた。兩側は純粹の熱帶林で、龍舌蘭や種々の椰子類の植物が茂つてゐた。左手にはいつも青々とした山を仰いでゐたが、僕は今にも生蕃がその山蔭から槍でも持つてきやきやさ出て來さうな氣がしてならなかつた。沿道には殆んさ部落は無かつた。在つても大方臺灣蕃人部落であつた。然し一寸した部落があると思ふさ必ず小學校（公學校さ云ふ）があるので、流石に隅々まで教育が普及してゐる事

に感心した。乗合自動車であつたため、中途から蕃人の女が二人も乗込んで来た。全く判らない言葉でいつも喋りつづけてゐた。恒春で少憩して、同じ自動車（但此處から「貸切り」を云ふ名義）で數里の道を海岸傳ひに目指す鷺鑾鼻（一名南岬）の燈臺に着いた。此の燈臺は我國の臺灣占領前に清國

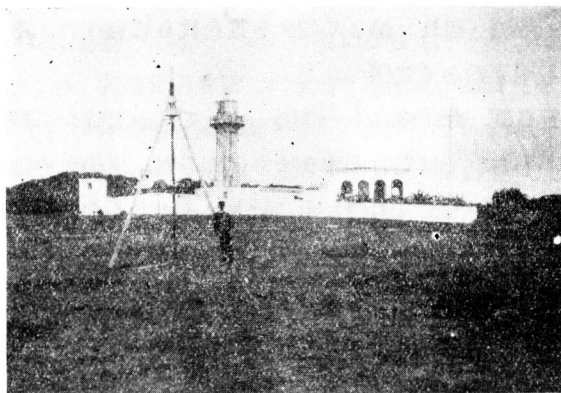
（二月一日）



ガラ
ンビ
燈
台
の
門
前

が英國の技師に作らしたもので、全體を土壁で圍み、宛然城塞である。當時蕃人の來襲に備へたものだそうだが、今は全くその心配はないそうである。案内されて燈臺の頂上迄上り、遙かに南の方を見渡して感慨無量であつた。南方8哩の海上に碎ける白波でそれと見えるのが「七星岩」を云ふ岩である。

（二月一日）



燈
台
の
遠
望

此れは『高雄州恒春郡恒春庄七星岩南端、北緯21度45分25秒（帝國南端）』を案内記に書いてある。しばらくして又同じ自動車で、折りからの逆風に

耳朶を射られながら、同じ道を潮州まで引き返した。但し恒春からは「乗合」に云ふ名義になつたために、道で客がふえて、小型自動車に十二人も鈴なりになつた。夕方漸く五十五里の間ゆられた自動車を下りて、汽車で高雄まで行き、此處で一泊した。將來臺灣に天文觀測所を設けたい希望のみに、その候補地としての高雄を調査するためであつた。此の日、京大野球團は高雄で試合をして大勝したと云ふことを聞いた。

二日。午前中高雄市附近の山地、高臺を調査した。正午頃汽車で臺南に歸つた。高雄は實際立派な港であるが、汽船の煙突からは煙が多くて、觀測所を設けるのには不適當だと考へられる。

三日。矢張り臺灣で天文觀測の好適地として阿里山を實地調査する筈であつたが、都合が悪くて中止した。その代り故一戸直藏博士が同じ目的の下に明治四十年頃調査された「新高山＝關スル研究報告」を読んだ。午後は例の十六糎反射鏡を三階に移した。今晚からいよいよ彗星觀測を開始するこゝになつた。

彗星觀測のための數夜

三日夜九時頃出掛ける。天氣悪く全く、絶望的、眞夜中過ぎて、宿にも歸れず、特に僕等のために貸して戴いた教室の中で寝たり起きたりして、夢遊病者の様にぶらぶらしてゐたが、夜明けを待ち兼ねて五時頃宿に引きあけた。十一時頃（四日）起きて朝食を晝食代りに食べた。それでも、午後の間、何も用事がなくて困つた。

四日夜一日朝。此の晩は十一時頃一寸ねて、十二時から觀測に出掛けた。餘り感心した空ではないが昨夜よりはまだ。雲のためにノブ・ビクトリスも見えないし、又月のために彗星はみつからない。それでも夜明け前に南の地平に「十字架」座の星がみえ、段々「南十字」が全身を現すのを見たのは愉快だつた。生れて初めて、幼い時から話に聞いたり本で讀んだりして、見たい見たいと思つてゐた「南十字」を、今はからずも臺南の地でながめようとは！ 朝六時頃宿に歸つてゐる。正午頃起きて顔を洗つてゐるこゝ、宿の女中が「お早うございます」と云つて笑ふ。朝食の後、僕は獨りて臺南市街を散歩した。ここは臺北市よりも内地人が少なく、商業は盛

んであるが大方本島人の獨占の感がある。

此の頃の日記をくつてみるに日附がない。其れもその筈、此の頃は毎日、夜を晝と轉倒した生活をしてゐるので『日附變更線』がほんやりして居るのだ。山本先生は午前中、觀測から歸つてからの外、寢むられないが、僕は夕食後一と眠りして觀測に出掛けるものだから、さつぱり日附がわからなくなつてきた。

（二月三日の午後）

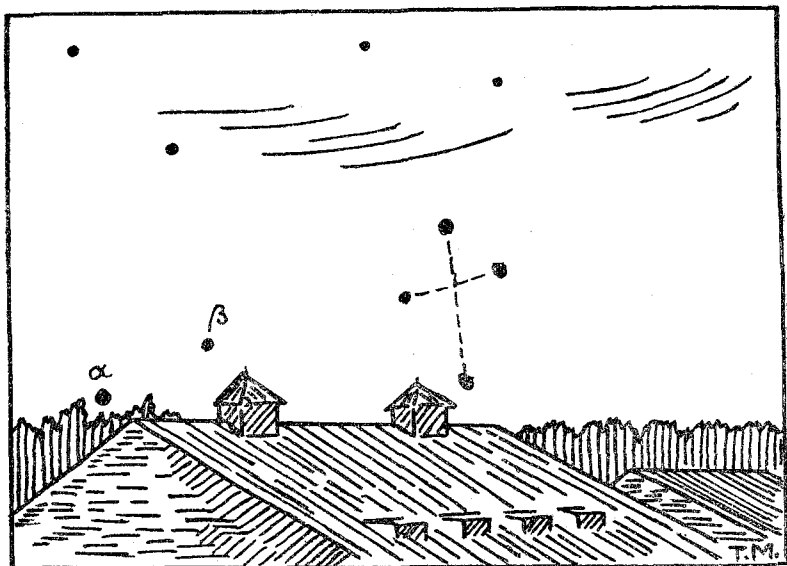


「吳姓普施式」

五日夜一六日朝。十時頃出掛ける。今晚は雲は無いが、一面に低く霧が立ち込めて何も見えない。二人は顔を見合せて歎息。臺南の天氣は晝の間は實によい。殆んど雲一つない。それに夜になると、どうしたこゝか一向氣持よく晴れない。渡邊氏のお話しによる季節風の加減だそうである。夜の二時頃、本校（師範學校）の地理受持ちの木村教諭が見舞ひに來られた。

一晩中おきて空を眺めてゐたが、星一つ見えず、その中、東の方に赤い色にかすんだ三日月が上つてくる。鴉がなく、仕様がなから二人は宿に歸つてくる。いつになつたら本氣に晴れるのか知ら！

六日夜一七日朝。僕だけは夕食後一と眠りして、やつとねむりついたと思ふ頃先生のお聲に眼をさまし、いつもの様に出掛ける。旅館の方でも誠に變なお客だ。初めは思つてゐたらしいが、此の頃は、悟つてか「星の國まで行つていらつしやい」などと挨拶する。今晚は素敵によく晴れた。ノブ・ピクトーリスを觀測する。光度7.9等。本校の田中校長が眞夜中に見舞



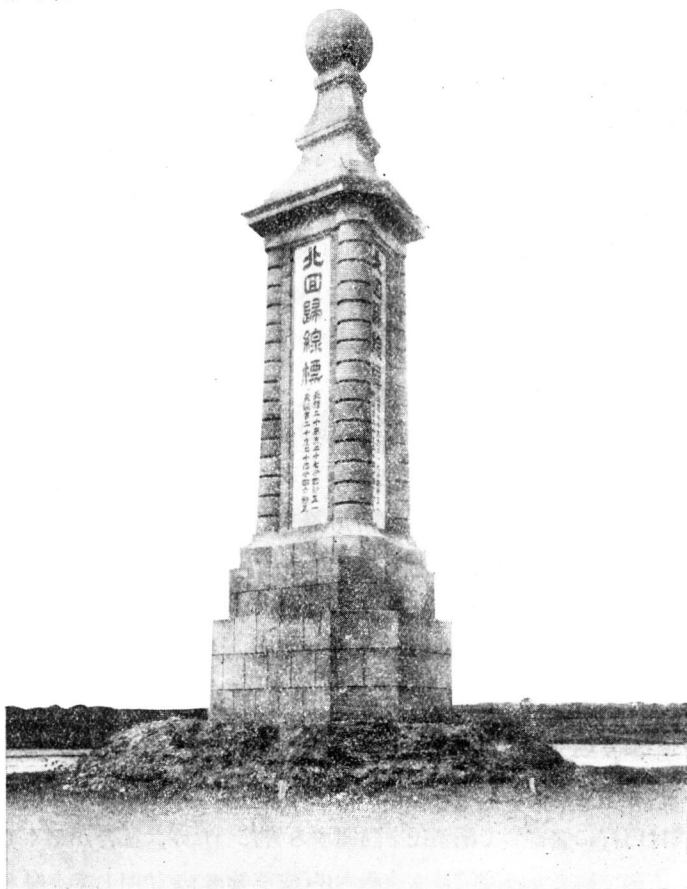
臺南師範校の三階から見た「センタウル」星座と「南十字」星座

ひに來られた。山本先生としばらく話して居られた。山崎彗星をさがしたが、みつからない。外に獲物もがなと東の空を「彗星探し」をやつてみたが何もみつからなかつた。

七日。愈々冬休みも終りさうになつた。月の方の都合は、遅い程、彗星のために好い。だが彗星の方は山本先生の計算によると毎日大變な速さで地球から遠ざかつて行く。

晝すぎ測候所の渡邊氏がいつもの様に來訪された。午後は田中師範校長及渡邊氏に案内され自動車で臺南神社、開山神社、孔子廟、臺南市場、安平港跡などをまわつた。夕食は田中氏の招待を受けた。夕方山本先生は臺南市及附近の中等學校の先生方のために、今回の彗星の話を主とし天文全般にわたり幻燈畫を使つて講演をなさつた。星座を實地に説明出来る様にと、特に校庭でお話しをなさつた。大變面白い試みだと感心した。先生の講演の後で反射望遠鏡を使つて火星、木星、オリオン大星雲、ペルセの二重星團、双子の α 星などを皆の人に見せるのを手傳つた。全部終つてから、又反射鏡を三階に持ち上げて觀測を初めたが、夜半過ぎから又空が曇つて、

星一つ見えなくなつた。仕方が無いから椅子によつて何時のまにか眠つてしまつた。眼ざめてみるに朝の五時、先生はその後、彗星をさがして、それらしいものを探しあてられた。僕はついねむつて最後の朝を斯くして過してしまつた。さて、かねて頼んで置いた運送屋が來たので、直ちに望遠鏡の荷造りをさせ、僕も手傳つた。先生は急いで旅館に歸られ、一足先に汽車にのられた。僕も次いで宿に歸り、出發の準備をし、臺南測候所を訪問して器械をみせて貰ひ、偶然此所で臺北帝大の氣象學の白鳥助教授とお目にかかつた。



台灣の天文上の名所
北緯 $23^{\circ} 27' 4''$ の通過する所

歸 途

十時過ぎの汽車で、思ひ出多い臺南を後にした。南下の時、ミスして残念に思つて居た北回歸線標を嘉義驛の手前で眺めた。嘉義で山本先生と一緒に、夕方臺北に着く。上り列車は海岸線を通つて來た。下車するまゝ直ぐ山本先生は迎への自動車で放送局に向はれた。僕は臺灣日日新聞社に向ふ途中、山本先生の聲がマイクロホンから臺北の街に響いてゐた。山本先生のお出でを待つて、臺日社樓上ホールで「臺灣で見える星の話」を云ふ題の下に幻燈を使つて興味深い講演を聞いた。その夜、二人は支部幹事の見元氏宅に泊めて貰つた。翌朝、見元氏が天文觀測所として最近建てられた塔の上に上つてみた。午前中は臺北測候所を訪問して諸設備を見せて貰つた上、丁度午前十時の船橋無電の報時を聴かして貰つた。尙、時計室の隣りの子午儀室には精巧な子午儀が備へつけてあつた。寺本所長のお話しに據るに、此の頃は無電の報時で充分なので餘り「天測」(天文觀測)はなさらないさうである。午後、大急ぎで速水氏に案内されて博物館を見學し、其の後、汽車で基隆に向ふ。發動船で驛長の御案内で港内を巡つた。その後、僕等は大和丸に乗船した。午後四時出帆。五色のテープが風にひるがへつてゐた。基隆港外で少し船がゆれた。

十日。波靜か。正午船の位置北緯 28 度 13 分、西經 124 度 43 分。基隆より 241 浬、門司に至る 504 浬。

十一日。一日中、陸見えず、波靜か。船中各所を散歩してみる。そろそろ陸が戀しくなつてきた。室に入つて山本先生に習つた方式に従つて山崎彗星の軌道要素を中途まで計算した。先生が長い間使はれた對數表を戴いてこよなく嬉しかつた。

十二日。朝、船は關門海峡の入口で夜明けを待つてゐる。船は入港に手間取れた。漸く朝十時頃ランチで本船をはなれた。僕は急行で鹿兒島にゆく筈だつたが間に合はなかつた。山本先生はまもなく京都に向つて出發された。僕は臼杵に立寄つて稻葉氏を訪問する筈だつたが、都合が悪くて中止した。下關で梅光女學院院長廣津藤吉氏(支部幹事)を訪問して、楽しく午後の半日をすごした。それから、夜の急行で鹿兒島に向つた。

十三日。朝懐かしい我家に歸つて父母弟妹の元氣な顔をみて嬉しかった。

十五日。朝鹿兒島を立つて、十六日の朝京都に歸つた。流石に京都は寒い。丁度都合が悪くて、獨逸留學のため十七日出發された荒木先生にお會ひ出来なかつたのは残念だつた。

今になつて臺灣旅行のこゝを顧るに、色んな感想が湧いてくる。種々の點で學問的に考へて決して無意義な旅行ではなかつた。諸種の天體觀測に内地よりも好條件を備へてゐる臺灣に或る憧れをさへ感ずる。

此の旅行中、いつも親の如き親切を以て心配して下さつた山本先生に旅行中種々の點でお世話になつた方々に深い感謝を捧げる。又たこへ暫くでも會ふた人々を永く忘れないであらう。(昭四・二・五稿)

本年最初の新彗星

去る一月19日、デンマルク國のコペンハーゲン天文台から全世界に發送された報導に據るに、同月17日23時2分9(地方時)に、ドイツ國ベルゲドルクの「ハムブルグ天文臺」に於いて、常々リペルト寫眞望遠鏡により小遊星なごを觀測してゐるシヴスマン Schwassman 及びワクマン Wachmann 兩氏は、うし星座の東端(赤徑 $5^h46^m32^s$, 赤緯 $+20^\circ30'$)の天空に 11.0 級の一新彗星を發見した。此の彗星の運動は毎日西へ $28''$, 北へ $3'$ といふのであるから、可なり遠いものだらうと豫想される。(I. A. U. 回報第 216 號)

I. A. U. 回報第 217 號によれば、ベルジク國ユクル天文臺のデルポールト Delporte 氏は一月12日に撮つた一枚の天空寫眞の中に此のシヴスマン彗星の姿を認めた由。又、同回報第 218 號によると、米國ヤーキース天文臺のブンビースブルツク氏と張氏は一月 4日, 12日, 20日の三回の觀測結果から下記の如き楕圓軌道を算出した。又、ハーヴァード大學でも昨十二月19日の寫眞位置を發表した。此れて見るに、此等の日に早くも此の彗星の姿が偶然撮られたものらしい。

近日點通過の日	T	1929年 4月 1日 36 (U. T.)
近日點の引數	ω	$2^\circ 15'$
昇文點の黃徑	Ω	126 36
軌道面の傾斜	i	3 39
近日點の距離	q	2.030 (天文單位)
軌道楕圓の離心率	e	0.4358
公轉周期	P	6年83

故に、軌道は普通の彗星と言ふよりも、むしろ、小遊星と言つた方が好いぐらゐである。——とにかく之れが本年最初の彗星 1929a である。